
大日本帝国四番街へようこそ

斉藤雅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大日本帝国四番街へようこそ

【Nコード】

N0753A

【作者名】

斉藤雅

【あらすじ】

女子学生の藤波飛鳥は霊力を持っている。ある時友達の佳織と共に、喫茶店の古い扉をくぐるとそこには別の歩み方をした『大日本帝国』があった！！

第零話 異世界への入り口

「もう三月だったのに何だよこの寒さは！真冬並みじゃん！」
いつになったらコート無しで登下校できるんだか、と艶やかな黒髪の少女が叫ぶ。鋭い緋色の瞳は病的なまでに澄んでいる。

「本当に今年は春が遅いねえ。ウグイスの声もしないし。」

20歳ほどの女性が少女にブルーベリーの紅茶を勧めた。その勧められた少女は半ばため息をつきながら乾いた喉に紅茶を流し込む。

「佳織って紅茶淹れるの上手だよねえ……。」

喉にだけ春が来たみたい。そんな感じだった。

誰もいない閑静な喫茶店のカウンターをはさんで二人の女性は会話を楽しんだ。

誰もいない喫茶店

それは唯一の安息の場だった。

瞳が赤いだけでなく普通の人には見えないもの 例えば霊の
ような が見えるだけで周りから敬遠され続け友達など学校には一人もいない。親にも気持ち悪がられて捨てられた。そして佳織に引き取られて今の自分がある。

そんな忌まわしい回想を捨て藤波飛鳥は佳織に話しかけた。

「佳織、あれ何？」

飛鳥は随分使い込まれた木製の扉を指差した。一つだけ異彩を放っている。

「ああそれね……。」

洗ったカップを拭きながら佳織は

「異世界への入り口かな？」

いたずらっぽい笑顔で言った。怪訝な表情をする飛鳥に言った。

「行ってみる？」

『行ってみる？』この言葉ほど飛鳥の好奇心をくすぐる言葉はない。
小さな子供のように眼をキラキラさせながら、

「うん！」

満面の笑みで返事をする。

「じゃあ今日は閉店ね。」

カップを拭き終わった佳織は戸締りをするとその古ぼけた扉のノブに手をかけた。

「うわあ。」

目の前に広がる異世界に飛鳥の眼は釘付けになった。

第壱話

視界を覆わんばかりの建物。

狭い空。

どこか懐かしい感じのする町並み。

どれもこれも飛鳥にとってはとても新鮮なものに写った。

「ここが大日本帝国四番街。私の故郷よ。」

佳織は飛鳥の方を見ながら言った。大日本帝国
その言葉
に飛鳥は驚愕した。

「だ、大日本帝国う!？」

こ、この街が??、と初めて外にでた小さな子供のように両目を見開き、辺りをきよきよと見回した。その緋色の瞳には、はじめましてとも言わんばかりに建物が写り込んでくる。

「なんかあたしの中のイメージと全然違う……。」

「驚くのも無理ないわね。歴史の授業で習うことは全く別の歩み方をして来たんだから。例えば『向こう』の帝国みたいに言論統制とか廃仏毀釈運動みたいなことはやってないし、明治維新のときから民主主義もやってる。」

昔のお偉方がヨーロッパ回って「こりゃあいい!」って思ったことを全部取り入れたみたいね、と微笑む。

その時、建物の上から純白の狼
のようなもの、少なくとも飛鳥にはそう写った
が佳織のもとへ飛び降りてきた。

それはとにかく大きかった。飛鳥と佳織を背に乘せても余りあるくらい。そしてその純白の豊かな毛は炎が燃えるが如くに微風になびき頭には一對の金色の角がある。

「あら、お散歩帰り?」

佳織はそれに慣れきっているのか彼女の白い手でその狼の頭を撫でる。狼の方はじゃれつく猫のように佳織に甘える。

「こ、これ何なの？」

右手の指を狼に向けながら飛鳥は口をぱくぱくさせて言った。その姿はまるで黒船をみた江戸の町人のようだった。

「あ、そうだったわ。この子は吹雪。私の狛神こまがみなの。」

『狛神』という単語に飛鳥の頭の中にはたくさんの疑問符が生まれた。

「なにそれ？」

「うーん。なんていうか、陰陽師の式神みたいなものかしら。」

当の佳織も説明に苦心している。その様子を見て飛鳥はそれ以上のその狼に関しての質問をやめた。

「・・・佳織はここに住んでるの？」

「そうよ。本業はここで言霊師をやってて、むこうでのカフェは半分趣味。でもカフェの方はこっちとあっちを繋ぐ扉のような役目もあるけど。」

「何で繋ぐ必要があるの？」

別にやんなくてもいいじゃん、と訝しげに尋ねた。

「それは私にもわかんないわ。あくまでも私は帝国政府の下っ端役人だもの。そういう事は知らされないわ。」

「ええっ！？こっつてそういうオカルチックな仕事もできるの！？それも政府の役人！？」

もう飛鳥は混乱状態に陥っていた。扉の向こうの別世界。別の帝国。白い狼。そして奇妙な職業。何がなんだかわからない。

思考をぐちゃぐちゃにされた飛鳥を尻目に佳織は辺りを鋭い目つきで見回して言った。

「とにかく家に行こう。」

思考整理から現実に戻された飛鳥は、やはり疑問を湛えた表情で「何か用があるの？」

できれば飛鳥は佳織と一緒にこの街をぶらついたかったのだ。

「別に用があるってわけじゃないけど……。帝国は街によって治安の良し悪しの差が激しいの。特にここ四番街の治安は昼間は普通に平気だけど夜になったら帝国一のアンダーグラウンドよ。夕方も結構危ないのよ、いくら私は政府の役人だからって安心はできない。」

そう言うや否や佳織は狛神である吹雪の背に軽やかに乗った。その動きはさながら水が流れるように。

「急ぐわよ。」

乗って、と佳織に促されると飛鳥はおっかなびっくり吹雪に手を触れる。誰だって最初はいい気分ではない。ましてや見た事の無い『異形』の生物に乗るなど。

「噛んだりなんかしないわよ。」

それでも躊躇う飛鳥に痺れを切らしたのか佳織は優しく飛鳥の腕を引き吹雪に乗せた。

「うわあ、ふわふわ。。。。」

飛鳥は静かに驚いた。

「じゃあ行くわよ。」

その言葉を合図に吹雪は大きく飛び上がった。

「と、と、と、飛んでるう！！？」

飛鳥はもはや遠くなつた街を見下ろした。佳織のほうは飛鳥が驚くには気にもせず、ただ真つ直ぐ前を見詰めていた。紺碧の空には大きな満月が懸かっている。月光に照らされて佳織の黒髪は銀色に輝いている。吹雪の毛もまたそうだった。銀色の炎が燃えるようになびいている。黒と白を基調とした服もそう感じさせるのか傍からみればそれは月夜を行く魔女のようだった。

飛鳥は町を見下ろしている。

白熱灯のような光を発する電灯がこれでもかと建物が詰め込まれた街を内側から照らしている。その中には現代風のネオンもあり、レトロな街のなかで異彩を放っていた。こんなに空高く離れているのにネオンと認識できるのだからよほど大きいのだろう。

明治、昭和の時代が混ざるなかにどこか現代の風が入り乱れていて、
なんとも摩訶不思議であった。そして人間味のない無機質な現代社
会のビル群とは違って有機的な暖かさが感じられた。

冷たい風がとても心地よく飛鳥の頬と髪を撫でていく。

白銀の月に照らされて飛鳥はもうひとつの『大日本帝国』に思いを
馳せた。

第式話 始まり

「そう言えばさ。」

「何？」

「佳織は言霊師をしてるっていったじゃない？具体的にはどんな仕事なの？」

「そうねえ、とその細い人差し指を口元に当てながら佳織は言葉を組み立てている。しかし両眼は前を見つめたままだった。

「日本人は言霊を信仰している民族なの。少なくともこの帝国では言霊っていうのは人が発した言葉に宿る感情のない精霊みたいなもので、人によつては自由にそれを使える。その中には生まれつきだったり、訓練で使えるようになったりするものもあるけどね。言霊師はその言霊を使ってこの世の森羅万象を操作して仕事をするの。基本的にこれと言った内容はないわ。殆どが政府からの命令なんだからたまには一般の人からも仕事がくるの。例えば」

「例えば？」

「お疲れとか幽霊退治みたいなとかかな。特に四番街や一番街は鬼やら神様やら向こうの日本では眼に見えないものがたくさんいるからね。あ、もうすぐ私の家よ。」

飛鳥は佳織が指差した方向を見た。そこには高層マンションが建っていて、やはりそれもレトロな雰囲気醸しだしていた。内側からは明かりが暖かく漏れていて見えているだけで冬の寒さが消えていきそうだった。

吹雪が少しずつ高度を下げる。先程とは反対に街という『箱』に詰め込まれた建物が段々近くに見えてきた。次第に佳織のすむマンションの看板に書かれた文字が鮮明になってくる。

「はい。ご到着。」

吹雪は『四番街マンション 華陽』と書かれた看板の前に降り立つ

た。その際には4本の脚の周りに小さなつむじ風が巻き起こり降り立つ様は鳥の羽のようだった。

「ご苦労様。」

微笑みながらそう言うと、佳織は吹雪の頭を優しく撫でる。吹雪は気持ち良さそうに眼を閉じるや否や、自らを風と一体化させて再び月に照らされている夜空へ飛び立った。

「あつという間に夜になっちゃったね。」

緋色の両眼で飛鳥は空を見上げた。月明かりに照らされて普段の混じりっ気の無い黒髪は銀色に輝いている。

「明日は学校あるの？」

軽く伸びをしながら佳織は尋ねた。

「ううん。だって今日中学の卒業式だったし。まあ高校に上がってもおんなじ学校だけだよ。それはどーでもいいとして」

早く春になんないかなあ、と飛鳥もまた伸びをした。

「じゃ、部屋行こうか。」

今日は早く寝よ、と言いながら歩き出す佳織に飛鳥は着いていった。

「ああやっぱりお風呂って最高」

ドライヤーで乾かした髪を自慢げにブラシで梳かしながら飛鳥は言った。

元来彼女はお風呂に入ることが好きだった。風呂上りのさっぱり感
は自分の悪いものが全て流れていったような感があるからだ。

その時飛鳥はふと髪を梳かすのをやめ、

「ねえ佳織。」

「何かしら？」

「この国で太平洋戦争ってあったの？」

「あったわよ。だけど日本が負けたわけじゃないの。簡単に言うと

最初は日本が優勢だったんだけどアメリカが段々盛り返してきたわ。当の日本も負けるわけには行かないからそりゃあもう頑張ったわね。向こうの日本と近代からは似たり寄ったりでも根本は違うからね。

神風特攻隊はあっても南京大虐殺はなかったり。それ。

でいろいろしているうちに戦争が膠着状態になって結局は講和したわ。今となつては持ちつ持たれついい関係つてところね。」

「じゃあ日米安全保障条約もないってこと？」

「そういうことね。」

じゃあ、在日米軍もないのかなあ、と飛鳥は思ったが聞くのをやめた。

「明日は仕事あるの・？」

代わりにそう尋ねた。

「えーと二つぐらいあったような・・。」

記憶を掘り出すように佳織が答えた。

「ホントツ！？あたしも行きたーい！ねえっ、良いでしょ？」

幼児のように無邪気に飛鳥はおねだりをする。彼女にとっておねだりは久しぶりだった。本当に欲しいものは自分で何とかしたし、いつもおねだりをする相手。例えば自分の両親。がい

なかったからだ。

そんな飛鳥の心境を知ってか知らずか佳織は苦笑しながら

「じゃあ明日は早起きね。服は・・・今着てるみたいな私ので良いかしら？」

「うんっ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0753a/>

大日本帝国四番街へようこそ

2010年10月11日23時56分発行